



氷見駆け万感ゴール

北國新聞創刊130年記念ひゃくまん毅フレンチ第35回ツール・ド・のと400(同実行委、北國新聞社主催)は最終日の18日、七尾市から氷見市を経由し、金沢市を目指す138・2キロで行われた。明治時代、北陸で初めて開催された「自転車大競走」を源流とする伝統の大会で3日間計411キロを走り抜いた参加者は、ゴールで誇らしげに完走証を掲げ「歴史をつなぐ一員になった」と歓喜の輪を広げた。

ツール・ド・のと400

エントリーした。七尾市を出発した一団の先頭が氷見市に入ったのは、雨が強くなった午前9時ごろ。比美乃江公園多目的広場では、同市サイクルスポーツ協会や市役所の職員らが笑顔でずぶぬれのサイクリストを歓迎した。

「自転車大競走の歴史つないだ」

「絵になる景色ばかり」
富山市、砂田さん(62)は、自転車の本場欧州で30年以上と活躍したサイクリングフォトグラファー。ツール・ド・フランスでフォトグラファー300人中、12人のみ認められるオートバイに乗車しての撮影を約15年続けた砂田さんは、「美しい海岸と昔ながらの家々が残る能登は絵になるポイントばかり。3日間あるのも素敵で、挑戦する気持ちにさせてくれる」と強調した。



富山湾の眺望を楽しみながら、海岸線を駆け抜ける出場者
—氷見市間島

富山新聞で「人生妙なり」を連載するエッセイストで俳優の「青妙さん」は「3日間だからこそ、選手同士や地域との一体感が生まれる。ツール・ド・のとは唯一無二の大会」と3度目の挑戦を振り返った。

県内9地点真夏日
18日の富山県内は高気圧に覆われたものの、湿った空気の影響で曇りや雨となった。最高気温は富山市中心部32・9度、朝日町32・3度など全10観測地点のうち上市町29度を除く9カ所で30度以上の真夏日だった。

全日本シクロクロス選手権マスターズで優勝経験を持つ落合友樹さん(40)「東京」は沿道の声援が印象に残っているとし「これほど

までに住民の理解を得られる大会は他にない。歴史が長いからこそ「ど」を込めた。

まだに住民の理解を得られる大会は他にない。歴史が長いからこそ「ど」を込めた。